

ひたすらドラゴンを倒すだけ  
【ノベライズ版】

目の前にドラゴンがいる。

竜種の中ではありふれた奴らしい。だが強敵だった。

少なくとも今の彼にとっては、圧倒的で、理不尽で、強大無比な、神にも等しい不可能な敵だ。だが彼は逃げない。

そもそも彼の中に逃げるといふ選択肢がない。

——戦う。

——攻撃する。

——どちらかが倒れるまで。

それだけが彼の存在意義。

ドラゴンが大地を踏みしめる。ここは切り立った山の頂上。その姿は隠れもせず、堂々と彼の目の前であって、敵意を秘めた静かな眼で彼を高めから見下ろしている。

——戦う。

彼が一步踏み出す。

ドラゴンは悠然と大きく息を吸い込んだ。尾を撓め、ほとんど背中を向けんばかりに身をひねって彼を待ち受ける。その姿は、まるで彼の一撃に注意を払っていないかのようだ。

否、実際に何一つ気に留めていないのだろう。

彼が繰り出したのはただの木の棒。全力を込めて振り下ろした攻撃は、ドラゴンの鱗にかすり

傷程度しかつけられない。

そして逆に、ドラゴンの放った尾の強烈な一撃は、彼の意識を天まで吹き飛ばすに十分な威力を持っていた。

高く舞い上がった彼の体が、山の斜面をゴロゴロと転がり落ちていく。  
全身骨折は免れないだろう。それでも、痛みで彼が目覚ますことはなかった。

†

——才能の種というものが、あるのだそうだ……。

——才能の、種。

——山の上に棲むドラゴンが……。

——もしも、勇者ならば。

彼は眠りの中で、そんな夢を繰り返し返してみた。

「……もう大丈夫です。さあ目を覚まして！」

彼は幻と現実の境が曖昧なまま目を覚まし、ぼんやりと天井を見つめる。天井——知っている。  
ここは村の小さな教会の寝台の上だ。

また、ここか……。

何度あのドラゴンにやられたことだろう。そのたびにこの寝台の上で目覚める。全身を襲う痛みとけだるさも、もうおなじみのものだ。

「あなたという人はまったく、本当に懲りない人ですね……」

村に一人だけの尼僧が彼のそばに立っていた。腰に手を当ててぶんすかと怒っている。

この尼僧は、頼まれもしないのに彼の挑戦を山の麓で見守り、そのたびにボロボロにぶっ倒される彼を回収して治療を施してくれる。奇特というほかない。

「あなたはいつたい、何のためにこんな無謀なことを続けているんですか。いつか本当に死んでしまいますよ」

そうかもしれない。

それでも、彼に立ち止まるという選択肢はなかった。

「はあ……いくら言っても聞いてくれないんですね……」

一応、お礼だけはいつも言っている。

彼は痛みをこらえて起き上がり、足を引きずるようにして教会を出て行った。

「才能の種なんて、本当にあると思ってるんですか？」

尼僧の言葉が彼の背を叩く。

彼は答えない。

本当にあるかどうかじゃない。やるか、やらないかだからだ。